

受け継がれる伝統

糸井地区の なんまいだ



錆(かね)の音とともに数珠を繰り、元気よく「ナンマイダ」と唱える子どもたち(宿)

糸井地区で百万遍念佛が始まつた時期ははつきりしていませんが、江戸時代には既に行われていたと考えられています。

また、糸井地区だけではなく、橡久保地区でも近年まで暑さの厳しい時期に「なんまいだ」を行っていましたが、現在は休止しています。

糸井の吹張、宿、中宿、中内出、常添。南内出、上内出の7地区では毎年6月下旬、「なんまいだ」が行われます。

「なんまいだ」は、無病息災を祈願し、農作物に被害をもたらす害虫を追い払うために行われる伝統行事で、小学生が地区の家々を練り歩き、鉦(かね)を鳴らして「ナンマイダ、ナンマイダ」と数珠を繰りながら唱えます。

糸井地区で「なんまいだ」と呼ばれているこの伝統行事は、もとは「百万遍念佛(ひやくまんべんねんぶつ)」と呼ばれるもので、極楽往生や故人の追善、祈願を目的に7日間から10日間かけてお経を百万回唱える仏教の法会のことです。

この百万遍念佛は、大勢の人や大きな数珠を繰ることで百万回念佛を唱えたのと同じ効果があるとされています。

百万遍念佛の起源は古く、平安時代に日本に伝来したと言われています。その後、室町時代から戦国時代にかけて、都から地方の村々に広まりました。

糸井地区で「なんまいだ」と唱える「なんまいだ^{べん}



勢いよく数珠を繰る子どもたち(吹張)



「ポンゼン」を振り無病息災を祈る(中内出)

糸井地区で行われている「なんまいだ」

糸井地区では、百万遍念仏で唱える「南無阿弥陀仏（ナムアミダブツ）」というお経がなまつて、「なんまいだ」と呼ばれるようになりました。

6月の農繁期になると大勢の子どもたちが数珠を繰り、「なんまいだ」を行います。

以前は、10歳くらいから14歳くらいまでの地区の男の子が全員集まり、夕方から夜間にかけて、行わっていましたが、現在では小学6年生を親方に、男の子も女の子も関係なく、夕方子どもたちが集まって、先頭に「ポンゼン」、次に「鉦（かね）」を担ぎ、その後に3メートルくらいの大きな数珠ひもを持ち、行列を作つて家々をまわります。

「なんまいだ」の期間中は、子どもたちが毎日各家をまわり、ポンゼンを振り、鉦を鳴らして「ナンマイダ、ナンマイダ」と大きな数珠を繰りながら唱えます。

このとき、各家から「奉願（ほうがん）」としてお金を集め、「結願（けちがん）」と呼ばれる最終日に、集めた奉願で各家にお礼の品を贈ります。

受け継がれる伝統

常木地区では今年、6月25日から27日の3日間、小学1年生から6年生までの27人が、

鉦の音とともに「ナンマイダ、ナンマイダ」と元気な声を張り上げて、地区の家々を練り歩きました。

また、吹張地区では6月27日・28日の2日間、「なんまいだ」を行いました。

「なんまいだがきたよ」と、やつて来た子どもたちを笑顔で迎える塚本正夫さん（78歳）は「なんまいだをしてい



笑顔で子どもたちを迎える塚本さん(吹張)

がやつていたころを思い出す」と言います。

塚本さんが「なんまいだ」で鉦をついてまわったのは昭和20年ごろのこと。「昔は夕方集まつて、まずは川沿いの家々をまわり、夜になつたらちょうどちんを先頭に上段の家々をまわつた。すべての家をまわり終えるころには真っ暗になつっていた」そうです。

以前は男の子だけで行つていたなんまいだ。吹張地区では「平成に年号が変わったころから、女の子も参加するようになつた」そうです。

子どもたちが「なんまいだ」をする光景をみながら塚本さんは「今でもこうして、伝統の行事が子どもたちに受け継がれていることがうれしい」と笑顔で話していました。



家々を練り歩く子どもたち(常木)